

【日本留学レポート】

## 新たなる一歩へ

—日本の修士課程で学んだ経験をもとに—

To The New Step:

Based on my Experiences from Attending a Master's Degree in Japan

千葉大学大学院教育学研究科修士 シスワン マユリ

SRISUWAN Mayuree

(Faculty of Education, Chiba University)

---

キーワード：修士論文、教育、日本留学、大学院留学

### はじめに

2019年3月、私は千葉大学大学院を卒業した。先に言っておくと、私は沖縄生まれのタイ人である。もともとタイ人の両親が仕事の都合で沖縄に一時期滞在していたことがあり、私はその滞在中に生まれ、小学5年生まで日本の学校教育を受けた。その後、タイに帰国し、タイの大学を卒業するまでタイに滞在していた。そのため、留学生とは言っても初めて日本に来る留学生とはまた違う立場であり、少し異なった視点から日本での生活を味わえたと感じている。

本レポートでは、主に日本における修士課程の2年間の生活を通して感じたこと、よい経験になったこと、気付かされたこと等を書きたい。そして、本レポートが今後、日本への留学に興味がある人やこれから日本へ留学する人たちにとって、少しでも役に立てるような情報になれば嬉しく思う。

### 留学の決意から大学院生になるまで

なぜ私が日本に留学したいと思ったのか、なぜ日本を好きになったのかと疑問に思う人はいるであろう。「はじめに」で記したように、私は日本（沖縄県）とタイ（バンコク）の両国で暮らしたことがある。そのため、日本を好きになったきっかけは生まれ育った日本が故郷のように感じたからだと言っても過言ではない。それは、日本だけではなく、タイも同様であり、両親がタイ人であることからタイを自分の故郷のように感じていたということも事実である。両国を自分の故郷のように感じていた私は、タイの大学でも日本語を専攻して日本語を学び続け、大学を卒業した。その後、もし奨学金

を受けられる機会があれば、日本の大学院に進学したいと願っていた。そして、その機会が大学を卒業した2-3ヶ月後に訪れ、私はなんとか奨学金を受けることができた。正直に言うと留学を決意した時は、ただ日本に行きたい、故郷にもう一度戻りたいという想いだけがあって、大学院の厳しさや難しさは全く予想してもいなかった。大学院では、ご存じの通り、自ら課題を見つけ、それをテーマに研究に取り組み、論文にして書き上げていくことが最も重要である。そのため、奨学金を受けるには、自分が何の研究をしたいかを明らかにし、研究計画書を書くことが必要である。

まず、私は自分が研究したい研究テーマを探した。私はタイと日本の教育を受けてきたが、その中でも最も印象に残っている学校行事があった。それは運動会（体育祭）である。私はタイと日本の運動会を実際に経験したことがあり、同じ運動会という行事であっても教員の児童・生徒に対する働きかけや行事の実施方法に違いがあることに気づき、そこから両国の間でなぜそのような違いが見られるのか、また、両国の異なる教育から児童・生徒はどのような学びが得られるのか等を明らかにしたいと思い、自身の実際の経験に基づいてタイと日本の比較研究のテーマとして研究計画を作成した。

次に、自分の希望する大学院と連絡を取る段階に入った。私が千葉大学の大学院を希望したきっかけは、タイの大学で日本語を学んでいた際に、短期留学生として1年間千葉大学に留学することができるとの機会が与えられたからだった。それをきっかけに、私は大学院も是非千葉大学に進学したいと考え、短期留学生だった際にお世話になった先生方と連絡を取ることにした。その後、メールでのやり取りを通して、先生に研究計画書を検討していただき、自分の研究を指導していただける先生を紹介していただいた。紹介していただいた先生とメールでやり取りをすることも多かった。そこで私は初めて日本語でメールを書く難しさを実感した。一度も顔を合わせたことがない先生とメールのやり取りを通してその研究室の専攻生（又は研究生）として受け入れてくれるように検討していただくのは留学生にとってとても勇気がいるし、とても緊張する。先生にメールを返信するために、文章を書いたら消し、また書いては消しの繰り返しで、日本語の文法に間違いがないように、そして失礼のないように書かなければならないと思った。それが大学院に入る前の最初のミッションだったように感じる。幸い、その研究室の先生は、よく留学生を研究室に受け入れているため、私も歓迎して下さった。専攻生になった私は、入学試験に向けて、過去問を解いたり、教育学の専門用語を覚えたり、指導教員が担当している授業に参加したりして、試験に向けての準備を進めた。

入学試験が近くなると、さらに不安とプレッシャーが高まった。なぜなら、合格できる人数は数少なく限られており、私のような留学生は普通の日本人と同じ試験を受けなければならないからである。不安とプレッシャーのあまりに日本人に助けを求める勇気もない私に、研究室のある中国人留学生がごはんに誘ってくれた。彼女は、大学院の入学試験の経験があり、試験に落ちたこともあった。それでも諦めずに次の年にまた試験を受けてやっと合格したと話した。彼女は、自分の経験をもとに様々なアドバイスと応援の言葉をくれた。彼女は自分と同じ留学生である私が、試験前にどれほどの不安

とプレッシャーを抱えているかを誰よりも理解していた。だからこそ私の力になりたいと彼女は言った。

その結果、私は指導教員の指導や中国人留学生のアドバイスや応援の言葉のおかげで入学試験に無事合格することができた。緊張と不安から解放され、私は試験の結果が貼られている掲示板の前で喜んでた。しかし、これは大学院のはじめの一步に過ぎず、本番はこれからだった。

### 修士論文が完成するまで

先ほども触れたように、大学院では、主に自分の研究を書き上げていくために、実践を重ね、実践の結果や考察、内容の構成や妥当性等を様々な人の視点や角度から検討してもらう。また、多くの意見や指摘を受け、そこからもう一度自分の研究内容を見直し、内容を修正して完成させていく。このような作業の繰り返し、約2年間続くのである。とても厳しい道のりであり、メンタル的にも強くなくてはならない。

修士1年目の際は、まだ研究者になる覚悟が十分になかったため、先生や他の院生に研究の内容を批判されることを恐れて避けていた。毎週のゼミで私はなるべく、他人から突っ込まれないような内容ばかりを検討してもらっていた。相手から批判されることは自分にとって恥ずかしいことで、留学生である自分の日本語能力が乏しいことを指摘されることだと思い込んでいた。しかしそれは大間違いだった。

修士2年目に入ると、そろそろ論文も完成させなければならない時期が迫ってきて気持ちが焦る一方であった。何としてでも論文を完成させなければと思い、私は2年目に入ってやっと勇気を振り絞ってコンフォートゾーンから抜け出し、批判される覚悟をした上で研究の内容全てをゼミや中間発表会で発表した。時には心が折れそうになるくらい厳しい指摘をもらうこともあり、絶望的な意見ももらう時もある。さらには、発表後に誰からの質問や意見もなく長く沈黙が続く状態になる時もあった。そこで私は1つ学んだことがあった。それは、コンフォートゾーンにいることや沈黙状態にいることよりも厳しい指摘をもらった方が研究の方針ははっきり見えてくるということである。すなわち、失敗や批判を恐れてはいけないということである。

他にも、私は修士論文を書く上で苦戦したことがある。それは日本語で論文を書くことである。もしあなたも同じ留学生であれば、論文を書くときまでいなくても日本語で作文を書くことがどれほど難しいか理解できるであろう。日本語は母語でもないし、漢字等を覚えたり、上級レベルの文章の文脈を理解して文法や表現を使い分けたりすることができるまでに相当時間がかかる。日本語を学んでいる人なら誰もこのような壁に一度は突き当たったことはあるだろう。しかし、論文の執筆は私がこれまで学んできた日本語よりもさらにレベルが高く、文章を書く上で考えなければならないことは多くあった。基本的な文法や表現の正しい書き方はもちろん、研究の内容の正確さ、論文で使うよう

な硬い表現や専門用語、内容の構成等、同時に考えながら書き進めなければならない。これは留学生にとって非常に大変なことである。私は自分の頭の中にいるタイ語を日本語の文章に書き換えて日本人にうまく伝えられなかったことが何度もあり、指導教員や他の学生にも誤解を招いたことが度々あった。このような苦労がある中で、私は日本人のチューターがいて良かったと思っている。私の知る限りでは日本のほとんどの大学では、留学生の大学生活や日常生活のサポートをするために日本人をチューターとしてつけてくれるシステムがある。私もはじめの1年は日本人のチューターがついていた。チューターは授業の履修登録の仕方や論文の書き方等、様々な面でサポートしてくれた。そのおかげで私は何度も助かった。

研究室にもよるかもしれないが、私の研究室では、修士課程や博士課程の先輩や後輩が、修士2年生たちの論文の査読に協力し、論文の提出締め切りまで査読と修正の繰り返しをするハードな時期がある。それを私の研究室では「鬼コース」と呼んでいる。確かに地獄を想像させるような辛い時期だったと今も思い出されるくらい「鬼」だった。

振り返ってみると、日本人と同様に日本語で修士論文を150ページ近く書ききった自分は本当に信じられないくらい頑張ったと感じている。しかし、私が日本の大学院を無事卒業できたのは、周りに私を支えてくれた人たちがいたからだと思う。私一人の努力だけでは、ここまでの論文は書けなかつただろうし、メンタル的にもここまで持たなかつただろう。もし可能であれば、学位記にこれまで私を支えてくれた人たちの名前を全て載せて欲しいくらい心の底から感謝の気持ちでいっぱいである。

### 「学ぶ・教える」の経験

論文を書く上で私が指導教員から学んだことは山ほどあるが、その中でも印象に残っていることがいくつかある。例えば、足し算よりも引き算が上手にならないといけないことである。論文を書くために、我々はその材料となる資料を集めたり実践をしたりする。そして気づくと手元にある資料が徐々に多くなっていくことはよくあることである。必要だと思う資料を見つけたらそれをどんどん集めていく作業を足し算に例えるとしよう。そうすると、重要なのは引き算を上手にできるかどうかである。要するに引き算は、大量に集めた資料からどれが研究に必要で、どれが研究に関係ないものかを判断する作業のことである。確かに足し算よりも引き算をすることの方が難しいと私自身も実感した。他にも、論文を書く上で重要なことは、自分の論文を読みながら自分で漫才をすることであると先生は教えてくださった。すなわち、自分の書いた論文のボケ（穴）を見つけ、自分でツッコミ（指摘）を入れることである。

さて、ここまでは論文執筆の経験を色々語ってきたが、大学院では研究が全てではないことを忘れてはいけない。私は、教育学研究科に所属していたため、大学院の授業では学ぶ立場だけでなく、場合には教える立場に立つ時もあった。そして改めて「教える」ということに色々気づかされる経験を

得た。私はある授業で他の日本人学生とチームを組んで家庭科のゲームアプリを開発し、それを実際に小学校で iPad を利用して授業を実践したことがあった。教える我々は家庭科の大切な内容を児童に理解してもらいたいという目的があった。しかし、いざ家庭科の教えたい内容をゲームの世界に取り入れるとなった時に、ゲームの楽しさや（複雑すぎない）遊びやすさ等といった点に配慮することを忘れてしまうことが多かった。それは教える側、つまり教員の立場に 100%立っているからである。そのため、我々のチームは、児童にもっとゲームに興味を持ってもらえるようにアプリを何度も改善した。例えば、ゲームのキャラクターは性別を問わず、誰もが遊びたいと思うような親しみやすいキャラクターを描いてみたり、ゲームの展開やミッション、ラッキーアイテム等、学ぶ側を引きつけるような工夫をしたりした。

我々は、ゲームアプリを完成させるまでに約 3 ヶ月もの時間をかけた。そして完成したゲームアプリを実際に児童に遊ばせながら授業を進めた。その横で様々な教科の教員や学生が授業を観察し、評価をした。実践は無事に終えることができたが、フィードバックはイマイチだった。評価には児童を引きつけるような工夫が所々にあったのは良かったが、児童がそこから何を学んだのかがはっきり見られなかったとあった。確かに、我々は後半、ゲームの楽しさを意識しながらアプリを改善したため、児童に何を学んでももらいたいかという部分が薄れてしまったと反省した。

この授業開発は、「教える」ということは非常に奥深く難しいものだということを感じさせてくれた。学ぶことは自分自身の学力向上に必要であるため、自分を中心に物事を考える。一方、教えることは相手に物事を理解させることが必要であるため、自分を中心に物事を考えては相手に伝えたいメッセージがうまく伝わらない場合がある。児童が、授業をつまらないと感じたり、先生の進めるテンポが速すぎて追いつけないと感じたり、先生の教えていることが難しすぎて理解できないと感じたりするのも、教える側が学ぶ側の立場に立てていないからかもしれない。まずは、児童と同じ目線で見、自身の教え方を見直すことも重要であると気づかされた。他方で、学ぶ側につられて楽しく授業をしないと学ぶ側が振り向いてくれないと意識し過ぎてしまうと、我々のチームが経験したように、学ばせたい肝心なところを失ってしまう可能性がある。児童に難しいことを楽しく学んでもらうことは教員にとって理想かもしれないが、実際は、難しいことと楽しいことの釣り合いをとることがこんなにも難しいと私はこの経験を通して実感した。

修士課程の2年間で、私は本レポートには書ききれないほど多くの貴重な経験を得ることができた。これも日本の大学院に進学することができたからだと思う。





家庭科のゲームアプリを一緒に開発したチーム



開発した小学生向け家庭科の学習ゲーム

## 最後に

私は修士課程で論文を書いて行き詰まるたびに、日本への留学を決意したことが本当に正解だったのか自分に問うことがあった。研究で躓いて涙を流したり、投げ出したいくらいストレスが溜まったり、なかなか上手くいかないことだらけだった。母国に頻繁に帰ることもできないし、孤独を感じることもよくあった。しかし、振り返ってみると人生の中で一番自分を強く成長させたのは、今回の留学だったと今は胸を張って言える。日本に来る前は、日本語能力が向上すれば、それだけで留学したことに意味があると考えていた。しかし、実際に日本の大学院に進むと、日本語能力はもちろん、メンタル的にも倍くらい強くなったと感じる。私は、この修士課程2年間を通して、大学院生として、そして留学生として、数え切れないほどの困難の壁に立ち向かってきた。そして「困難にぶつかったり、心が折れたりすることは当たり前。大切なのはそこからいかに素早く立ち上げられるかどうかだ！」ということを学んだ。

生まれ育った母国を離れて他国へ留学することは勇気が必要だと思う。留学したいと思っただけでもその人を素晴らしいと私は思う。もしあなたが今、留学を考えているのであれば、留学は大変なことや辛いこともあるけれど、同時に新しい世界が見られるチャンスでもあると捉えてみてはどうだろうか。また、一人ひとりが留学で得られた経験は異なるのだから、当然留学した経験を心の中でどのように受け止めるかはその人次第である。私は本レポートに書いたことを、読み手に100%共感してもらいたいと思ってはいない。なぜなら、これはあくまでも私個人の立場と視点から得られた経験と学びに過ぎないからである。しかし、本レポートが誰かの留学決意のきっかけとなり、日本に留学して、自ら日本での生活を体感そして実感し、自分なりの歩み方で多くの学びと経験を積んでほしいと願っている。

私は日本に留学して、辛かった時や楽しかった時も色々あったが、それらを思い出として心に収めておくよりも、自分が留学で得られた学びや経験の全てを生かして他の人にも役に立てるように社会

に貢献したいと思っている。

帰国後、私はタイ人に日本語を教える教師になるが、そこで日本語を教えながら、留学で学んだことも伝えつつ、これから日本に留学するタイ人や日本に留学したいタイ人の手助けができたと思う。また、タイに留学にきた日本人やタイに留学したいと考えている日本人の力にもなれると嬉しく思う。それが、奨学金を与えてくださった日本の文部科学省と、私が大学院を卒業するまでにずっと支え続けて来てくださった多くの日本人やタイ人に感謝の気持ちを伝える方法、そして恩返しができる方法ではないかと思う。